

シンポジウム「医療と文化」-2

医療と茶文化

岩間真知子

静岡県ふじのくに茶の都ミュージアム

茶は古くは薬であった。眠りを覚ます、利尿などの効能が早くから知られ、中国の本草書（薬書）には必ず茶の記事があった。日本でも平安時代の『本草和名』や『医心方』から、鎌倉時代の茶と桑による特異な養生法の『喫茶養生記』、江戸時代の『本草綱目啓蒙』などまで茶は記されてきた。

茶樹、製茶方法、茶道具など、源はみな中国だが、漢字から仮名を作ったように、日本は安土桃山時代の千利休のころから、独自の様式と価値を茶に付与してきた。

安土桃山時代の医師・曲直瀬道三（1507-1594）は、日本医学中興の祖とあがめられる。当時の権力者・織田信長や豊臣秀吉は、茶道具を領地に代わる恩賞として与え、また茶会に招かれ、招くことを特権とした。すると道三は茶の湯の社会的価値を認識し、医療の技術や知識の上に、茶の湯を嗜むことで、さらに周囲から崇敬され、活躍の場を得たようだ。『道三家記』（杏雨書屋蔵）を見ると、茶の名器を所持したことが分かる。だが最晩年の道三は書簡に「蓼冷汁天目茶碗と鶉茶壺以外の茶道具は、老齢のため、みな分け与えた。鹿苑院（足利義満）御物の元の画家・顔輝筆の四睡図も、お世話になった貴方（三伯坐元）に差し上げたい」（「曲直瀬今大路家文書」慶応義塾大学図書館蔵）と述べる。所持した茶道具を周囲に分け、その価値を活かしつつ執着はしなかった。道三の息・玄朔は息子に「連歌、茶之湯、将棋碁以下之事、一切不可心懸 只朝暮之心頭、医道一遍ニ可仕事」（1596年）と記す手簡を与え、茶の湯などの芸事より医道に専念するよう告げている。

江戸前期の向井元升（1609-1677）『庖厨備用倭名本草』（1671年序）は、和文による日本の食物本草の先駆けである。その巻13は全巻が茶に充てられ、藤村庸軒の序文、茶部目録、本文そして「中郎先生茶譜」で構成される。自序に「東垣先生食物本草を取り略々これを訳し」とあり、李杲（東垣）『食物本草』を参考に同書を編纂したと記す。元升は底本を漢文のまま写さず、自分の言葉にして和文で述べるため、底本を特定しにくい。元の李杲編と称する『食物本草』には、明の万曆48年（1620）銭允治版10巻本、崇禎11（1638）年版22巻本、崇禎16（1643）年増補版22巻本がある。『庖厨備用倭名本草』が刊行される20年前、銭允治版を底本とした和刻本李杲編『食物本草』全10巻が刊行（1651年）され、日本に広まった。そのため一般的には同書を元升が参考にしたと思われる。しかし同書に「中郎先生茶譜」は収録されていない。

さて、『庖厨備用倭名本草』にある「中郎先生茶譜」は前文も本文もすべて漢文のままである。それは崇禎16（1643）年増補版22巻本『食物本草』に収録される「中郎先生茶譜」と、文も構成も完全に一致する。さらに『庖厨備用倭名本草』は加賀・前田家からの依頼で作成されたが、前田家の図書を取る尊経閣文庫には、同書が現存する。そこで元升が典拠とした李東垣『食物本草』は崇禎16年版22巻本であったと、「中郎先生茶譜」から確認できる。

さて「中郎先生茶譜」の実の著者と書名は、明の張源『茶録』（諭政『茶書』乙本[1613年]所収）である。往時の書肆が本を売るため有名な中郎先生・袁宏道（1568-1610）の名を冠したようだ。今日、明代の茶書として高評価を受ける張源『茶録』を、その当時に価値を見出し、元升は全文を収録した。それは日本の煎茶書『売茶翁偈語』（1763年）や上田秋成『清風瑣言』（1794年）が刊行される約百年前であった。

江戸時代も将軍はじめ大名間などで茶会は盛んに行われた。福岡藩士の本草学者・貝原益軒（1630-1714）は、武士に茶会の心得は必須として、茶席で恥を欠かぬよう作法を細かに記す『茶礼口訣』（1699年）を著した。益軒は『大和本草』では茶の効能や煮方などを和漢書から引用、『養生訓』でも茶を楽しく飲み養生に役立てる方法を記した。同じころ医師の竹中通庵は『古今養性録』（1692年）を著し、その巻八すべてを茶に充て、多数の中国茶書を引用、医業の傍ら漢籍を読みつつ茶を楽しむ様子が窺える。

江戸後期の享和3年（1803）、翠中軒知新は『茶茗功能記』全2巻を著した。茶の効能を諸書から抜粋し、茶を日々飲めば緩やかに効果が現れ健康を保持すると説く。知新は『茶道八炉図式』2巻（1785年自序）と「陸羽像」（版画1枚 1797年、国際日本文化研究センター宗田文庫蔵）も残し、陸羽を茶の始祖と位置付け、功績を評価した。知新の履歴は未詳ながら、江戸在住の医療者、または医業に詳しい武士であったようだ。

京都の福井家は、楓亭（1725-92）が幕府の医員となって以降、四代目の恒斎（1830-1900）まで幕府や朝廷に仕える名医の家であった。黒門元誓願寺南にあった屋敷を崇蘭館と称し、京の家並みが一望できる露台のある家屋は豪華で、多数の医学書などを所蔵した。

二代目榕亭（1753-1844）の門人・鎌田廉吉による『崇蘭館往来』（国文学研究資料館蔵 町泉寿郎翻刻『医史学雑誌』第68巻第3号所載）には、福井家と茶の関わりが見える。80歳を超えた榕亭を執事役の廉吉が尋ねると、ほぼ毎回茶菓の接待を受け、虎屋蒸菓子、大阪虎屋新製梅羊羹などをご馳走になる。天保6年5月17日、廉吉が尋ねると例の如く茶菓の接待を受け、帰り際、桐箱に入れられた新茶を渡される。榕亭が13歳のころに、父の楓亭が製茶をはじめ、すでに71年に及ぶ歴史を持つ、と聞くと廉吉は、餘斎（上田秋成）から煎茶は始まるというから、師家も古い歴史を持つと感心する。廉吉は11月にも同様に桐箱入りの家製茶をいただき、当日は青梅やピワの茶請けを薄茶ではなく煎茶の接待を受け珍菓と評す。天保8年2月9日には、京の町が見晴らせる千山万井楼で茶菓（カステイラ）をいただいている。

明治5年11月に福井家は京都小松原に移転し、四代目恒斎はそこで明治10年ころ茶室を作り、茶会も行った。美術行政官であった今泉雄作は、明治28年6月6日と12月22日の恒斎の茶会に招かれ、手記『記事珠』（東京文化財研究所蔵、依田徹論考『五浦論叢』第29号所載）にその様子を記す。スケッチから茶室は恒斎が建てた「赤楽庵」と推定され、それは博物館明治村に現存する。また紫檀の机に飾られた「法華経懐紙ノ帖」は、現在国宝である「一品経和歌懐紙」（京都国立博物館蔵）と考えられる。そのほか贅沢な茶道具があったことは、売立目録（1920年）からも察せられる。さりながら、恒斎の息・成功は「医術の外に、書画、茶湯、その他一切遊芸の門には入るなどの家訓」があり「我流で、宗匠に相談したこともない」という。

こうして道三から恒斎までの医療人と茶文化の繋がりを見ると、茶の湯は社会情勢から交流に欠かせず、教養としての知識も必要で、看過できないものであった。しかし玄朔の手簡や福井家家訓にあるように没頭することは禁じられた。一方、生死に関わり緊張を強いられる仕事柄だけに、茶によって得られる心身の安らぎや楽しみも捨てがたいものであったのだろう。医家は茶書も読み、茶会も開き、本業の傍ら茶の世界に遊んだようだ。それはこれからも同様ではなからうか。